

あやど 綾戸古墳

【所在地】岐阜県不破郡垂井町綾戸

【築造時期】6世紀末～7世紀前半

古墳の位置

綾戸古墳は不破郡の西部、相川下流域の緩やかに南へ傾斜する扇状地上に位置する。北に東山道（中山道）が通り、近世には墳頂の松が「熊坂長範物見の松」として知られた。東部には4世紀末の墳丘長87mの前方後円墳である矢道長塚古墳、墳丘長100mに及ぶ大型前方後方墳の粉糠山古墳、当地域最大の前方後円墳である屋飯大塚古墳、7世紀前半の円墳で横穴式石室を持つ車塚古墳などがある（図1）。

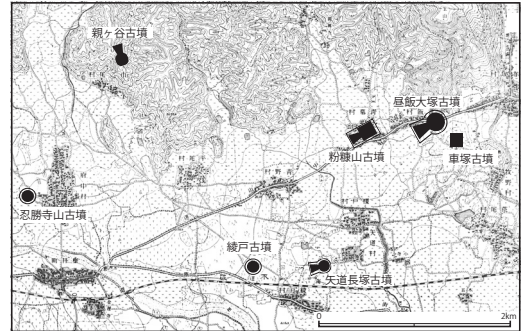


図1 古墳の位置

また北部には豊富な石製品が出土した親ヶ谷古墳、美濃国府付近には鉄鍬・銅鍬などが出土したとされる忍勝寺山古墳などが立地する。



古墳の現状

過去の調査と記録

1926(大正15)年の『不破郡史』においては方墳とされていたものの、その後の小川栄一氏の略測によって円墳であることが明らかとなった。1940(昭和15)年の報告の中で小川氏は「直径二十二間(約40m)、直高二丈一尺(約6.4m)」としている(図2)。

1994(平成6)年には台風の影響で倒れた木の根本あたりで葺石の一部が確認されたほか、古墳付近から須恵器の三足壺が出土したと伝えられている(図3)。墳頂部には武内宿禰を祀る石碑が建てられており、綾戸古墳は彼の墓であると称されることもある。

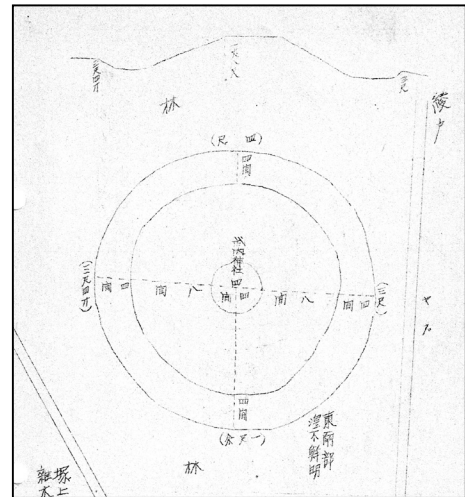


図2 昭和15年頃のスケッチ

墳丘の特徴(測量調査の成果)

2022(令和4)年8月に名古屋大学・南山大学・滋賀県立大学の3大学合同チームによる平板測量、名古屋大学によるトータルステーションを用いた測量、そして株式会社イビソクによるレーザー測量が実施された。測量図は平板測量とレーザー測量の結果を合わせたものである(図4)。

この調査で確認された墳丘規模は直径約40m、高さ約6.1mであり、小川氏による報告とほぼ同一の値である。北東部が墳丘の一部と共に大きく削平されているものの、墳丘の外側には幅約10m、深さ1.1～1.7mの周溝が巡っている。かつては雨天時にこの周溝に水が溜まっていたとされるが、底への泥土の堆積により溝が浅くなったと考えられる。

過去の記録から2段築成の円墳であるとされていたが、2022年の調査で新たに墳丘の南西・南東斜面の途中(標高22.0m付近)にテラス状の平坦面

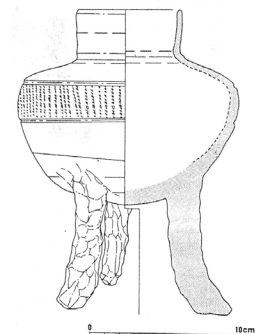


図3 伝古墳出土三足壺

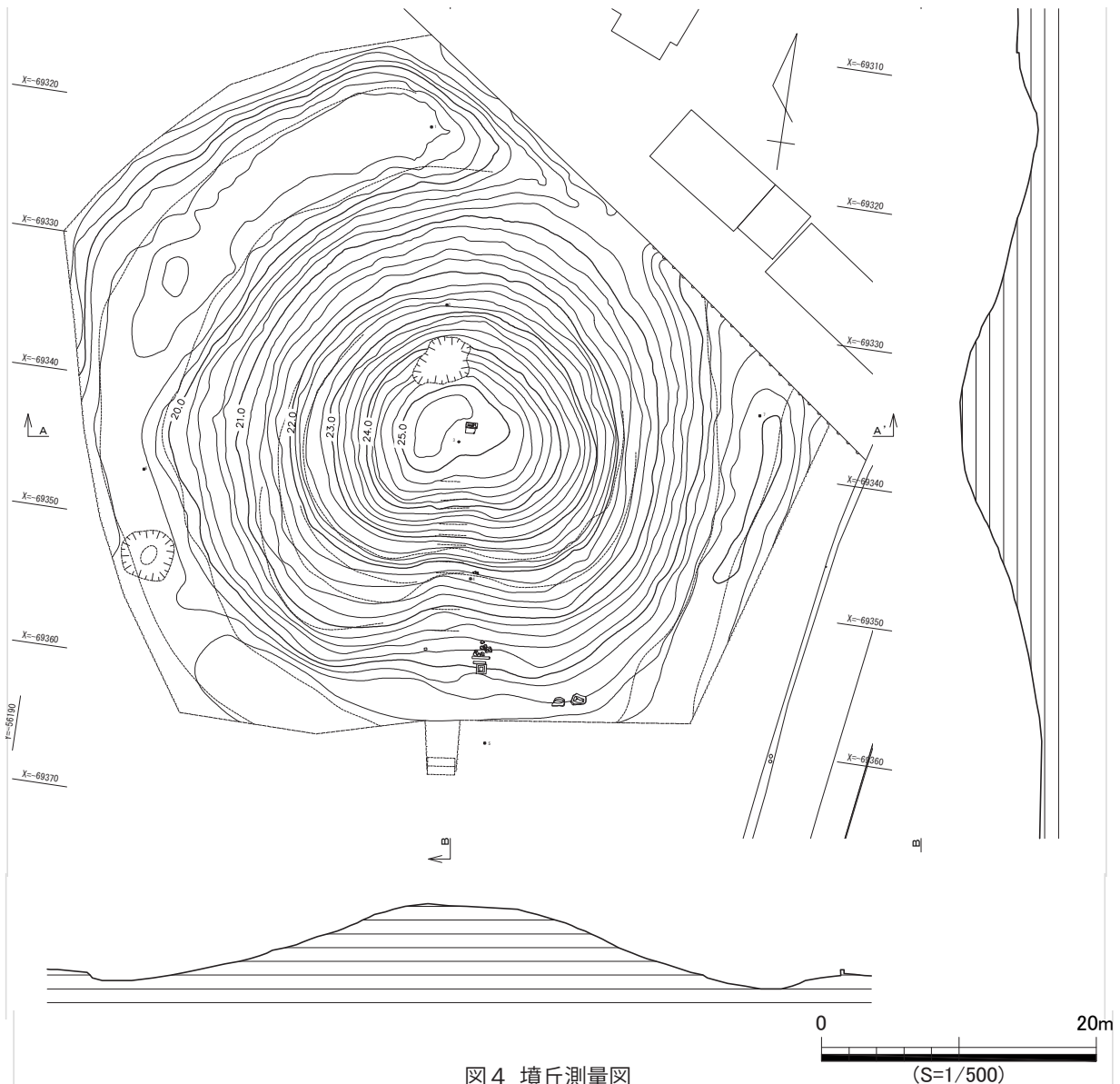


図4 墳丘測量図

が確認された。この結果から綾戸古墳は3段築成である可能性が考えられる。

古墳の意義

綾戸古墳は墳丘の形態や出土した三足壺などから古墳時代終末期にあたる6世紀末から7世紀初頭の築造であると考えられる。墳丘規模は終末期の円墳としては岐阜県、ひいては東海地方でも最大級であると評価できる。同じく垂井町内の古墳であり、終末期古墳としては美濃地域最大級の方墳である南大塚古墳と並んで、前方後円墳から方墳・円墳へと首長墓の造営が変化していく過程を考えるにあたって重要な古墳であると言える。

- 【参考文献】 藤井治左衛門 1926「本郡の後期古墳」『不破郡史』不破郡教育会
 小川栄一著作『稲葉郡調書三』（の原典）1931『郷土研究資料』第二号 岐阜縣師範學校郷土研究室
 小川栄一 1940「綾戸古墳」『岐阜縣史蹟名勝天然記念物調査報告書』第9輯 岐阜縣
 松居良晃 1990「岐阜県不破郡綾戸古墳出土特殊須恵器（三足壺）について」『大垣市埋蔵文化財調査概要—昭和63年度—』大垣市教育委員会
 鈴木隆雄 1996「古墳時代」『新修 垂井町史』通史編 垂井町